腐っても「タイ」の保育園を、再稼働します

園長　野中　泉

入園おめでとうございます。駐車場の桜の花も満開です。また新しい春が来て 24 名の新入園児を迎えられることを、大変うれしく思います。

春休みがない保育園の園長に就任して 5 年目。休む暇もなく、バタバタと新年の準備をする 3 月末の忙しさは、今もまだ慣れない私ですが、それでも、今年はいつもに増してワクワクと新しい一年のはじまりを待ち遠しく感じています。

私事になってしまいますが、アトムの園長になってこの 4 年間、なんとそのまるまる 3 年間が「コロナ禍の保育園」の園長でした。アトムに在園していた人たちも、他園にいた人たちも、家庭で子育てをしていた人たちも、皆一様にそれまでとは、まるで違う「不安」や「孤独」や「窮屈さ」の中で、工夫しながら必死に子育てをしてきたのだと思いますが、2020 年に入園したいちご組の赤ちゃんたちが、歩き、言葉を話し、もう今年はぶどう組（3 歳児）にもなるのですから、今更ながらに、ひとつのウィルスが私たちの社会に、そして子どもたちにおよぼした「事態」の大きさとその期間の長さに愕然とします。

残念ながら、コロナはなくなったわけではありません。それでもこの 4 月、私たちが、こうしてマスクを外して、子どもたちを迎えられるこの一歩は、ただ一枚の不織布を外したという事実以上の意味があると信じたいと思います。

腐っても「タイ」。題名に使わせてもらったこの言葉は、実は埼玉県の「わらしべの里共同保育所」の所長の谷川佳代子さんの言葉を、そのままにお借りした『パクリ』です。埼玉の北部の小さな町にあるわらしべの里保育園は、どんな子でも受け入れる場所がほしいと親たちが一から協力しあって 10 年かけてつくった園です。大きな養蚕農家をみんなで改築した手作りの園舎、小さな園庭にはお父さんたちが作った高い木造のやぐらがあり、小学生の子たちが豪快に飛び降りる。裏には畑があり、小さな子たちが冬でもはだしで走り回り、親もまた、ここに集い、話し込む。創始のアトムにも通じるその場所をつくってきたリーダーでもある谷川所長が語られた「ここは、腐っても「タイ」の会なのよ。障害児も入れる保育園がしたい、親も子も遊びたい、もっと広い園舎で遊びたい、動物も飼ってみたい、あれもしタイ、これもしタイ、ひとりひとりが「タイ」をもっていて、それを共有するんです。だから、苦労してもやれるんです」という言葉に、もう一度、私たちが目指す（取り戻す）未来への勇気をもらいたいと思っています。

3 月になって、園の前の道路から見えるいちご組前の芝生に、大きな丸太がごろんごろんと積まれて、放置してあるのを不思議に思っているお父さん、お母さんもいるかもしれません。実は、あの丸太はアトムの子たちも毎日のように散歩に行かせてもらっている長池オアシスのちびっこ広場にあったどんぐりや桜の木です。駐車場整備のために伐採された大きな木たちを、「捨てるのならください」とダメ元でお願いしに行ってくれたのは、明子さん（林事務員）と志賀ちゃん（志賀保育士）。地域で育った樹木の丸太を使って、お父さんたちと一緒に、子どもたちが思いきり遊べる「夢の園庭をつくりタイ！」ともくろんでいます。

給食の試食会も再開しタイ、放課後の小学生が園児と遊んでくれるアトムに戻しタイ、運動会（アトム・フェスティバル）の持ち寄りごはんも再開しタイ、味噌づくりにも挑戦しタイ！　地域のおじいちゃん、おばあちゃんたちも気軽に遊びに来てくれるアトムに戻しタイ・・・・。お父さん、お母さんたちみんなと、もっともっと、遊んで、話して、深く知り合いタイ・・・。

一度失ったからこそ、改めて気づかされた、たくさんの大事だったことたちを、「取り戻さねば」ではなくて「取り戻したい」と心から願っています。どうぞ、今年も力を貸してください。そして、次はぜひ、あなたの「タイ」も聞かせてくださいね。